

中学校英語教科書の物語文における 男女登場人物の表象

——社会的行為者 (social actors) に注目する——⁽¹⁾

稲 永 知 世

1. 序論

学校教育には、学習指導要領のなかに明記される顕在的なカリキュラムに加えて、隠れたカリキュラム (hidden curriculum) が存在する。この隠れたカリキュラムとは、「学校教育のなかで無意図的に伝達され、子どもが体得している価値や態度」(村松, 2003, p. 36) のことであり、「学校の組織・慣習・文化の中に体系的に組み込まれ」(木村・小玉, 2005, p. 31) ている。

日本の小・中・高等学校の学校教育では、「国民の教育を受ける権利を実質的に保障」し、「全国的な教育水準の維持向上、教育の機会均等の保障、適正な教育内容の維持、教育の中立性の確保など」(文部科学省, 2008; 下線は筆者による) の要請にこたえるために、教科書検定が実施されている。このことを踏まえると、日本の学校教科書は、一見公平公正で中立的であるかのように思えるが、実際には学校教科書のなかにも隠れたカリキュラムが存在していると言われている。たとえば、「女は家庭、男は仕事」といった性別分業のイデオロギー、「女は文科系、男は理数系が得意」または「男のほうが女より一般的に優れている」といった能力観、そして「女は優しく、静かで、情緒的」である一方、「男はたくましく、勇気があって、論理的」といった「らしさ」に関わる概念などの隠れたカリキュラム (木村, 1999, pp. 50-51) が潜んでいる。

ジェンダーの観点から隠れたカリキュラムの存在に焦点が当てられるよう

になり、1990年代前後からいくつかの実証研究が公表され（村松, 2003）、生徒に対して「男女の伝統的な役割や『男らしさ』や『女らしさ』の固定的イメージをも、気づかないうち学校は教えている」（木村, 1999, p. 48）ことが指摘されてきた。そして、この隠れたカリキュラムは英語教科書にも当てはまる（伊藤, 2006 など）。

では、物語文における女性像および男性像の固定的イメージとはどのようなものであろうか。たとえば、男性登場人物を「動作主 (agent)」、つまり能動的な社会的行為者とする一方、女性登場人物を「受益者 (patient)」、つまり受動的な社会的行為者とするイメージなどが読者に提示されていることが想定される。そこで、本稿は、批判的ディスコース分析 (critical discourse analysis, CDA) を理論的視座として、van Leeuwen (2008) の社会的行為者 (social actors) に関する分析的枠組みを援用し、平成 28 年度版中学校英語教科書の物語文における男女登場人物の表象を分析する。そして、これらのディスコース (discourse) のなかにも、ジェンダーに関わる隠れたカリキュラムが現存し、女性像および男性像に関わるジェンダー・イデオロギー (gender ideologies) が読者に提示されているかどうかを議論する。

2. 先行研究

日本国外の研究において、ESL 用の教科書を含め、さまざまな教科書のなかにジェンダー・バイアスが存在することがこれまで確認されてきた (Hartman & Judd, 1978; Jaworski, 1983; Jones et al., 1997; Leskin, 2001; Sunderland, 2015 など)。

とくに、Sunderland (2015, p. 12) は、初期の第二言語および外国語教科書におけるジェンダー表象研究を先駆的であるとし、意識の向上において重要な役割を果たしてきたものの、体系言語学的分析および視覚的分析（ならびに、マルチモーダル分析）は取り入れられず、1冊の（あるいはシリーズものの）教科書の内容分析となる傾向があったことを指摘している。そして、Sunderland は、以下の側面に注目することにより、内容分析を越えた、ジェ

ンダー表象の視座にもとづく分析が可能になると示唆している（同上，pp. 21-25）：

1. タイプとトークン（types and tokens）
2. サブジャンル（subgenres）
3. 言語学的分析（linguistic analysis）
4. 人間ではない登場人物（nonhuman characters）
5. 視覚資料およびマルチモダリティ（visuals and multimodality）
6. セクシュアリティの表象（the representation of sexuality）⁽²⁾

また、Sunderland (2015) は、上記の表象的差異（representational distinctions）を分析することが、結果の異種混交性（heterogeneity）につながると主張する。そして、3つ目の「言語学的分析（linguistic analysis）」に関する研究として、社会的行為者および社会的行為の表象（van Leeuwen, 2008）、総称語の he/man（masculine generics）、男女の語順（例、“husband and wife”）、明らかに性差別的でない語（例、“chairperson”など）に言及している。

そして、日本国内の研究においても、ジェンダー・バイアスが教科書の内容に存在することがかなり古くから指摘されている（村松，2003，p. 38）。そして、これまで英語教科書における言語とジェンダー研究では、(1) 敬称 Ms./Mrs./Mr. の使用、性差別語の有無、女性／男性を記述する形容詞や人称代名詞、(2) 女性／男性登場人物の出現数、(3) 女性／男性登場人物の並列順、(4) 挿絵における色づかい、そして (5) 文章・挿絵における人物描写などに重きが置かれてきた（Clark, 2016; Lee, 2018, 2019; Nakai, 2001; 石川，1999, 2004; 伊藤，1999, 2006; 崎田，1996; 佐々木，1996 など）。つまり、Sunderland (2015) の挙げる言語学的分析の一部はすでに日本の英語教科書研究において実践されてきたと言える。そして、ジェンダー・バイアスによる内容の違い（男女登場人物に付与される役割の表象など）は、繰り返しの指摘により、徐々に変化してきたものの、このバイアスが最新の教科書にも残っているとされている（村松，2003，p. 38）。

最近では、登場人物が遂行する発話の言語機能、発話数（比率）や発話量、そしてターン数にも焦点を当てた研究が増えつつある（Lee, 2019; Mineshima, 2008; Nagatomo, 2010; 石川, 2020; 鈴木, 2005）。たとえば、鈴木（2005）は、機能文法の枠組みを用いて中学校英語教科書の節レベルを分析し、ジェンダー・バイアスが存在するのかを考察した。その結果、鈴木は、女性を表す名詞・代名詞の使用が男性を表すものより少ないこと、そして動的・自発的な行為を遂行する人物は女性よりも男性として描かれる傾向にあることを明らかにし、この傾向は、「日本の社会に様々な形で存在する、『女性は副次的・受動的な役割を果たすべきである』というジェンダー・バイアスを強化するという、望ましくない結果をもたらす可能性が高い」（2005, pp. 25-26）と主張する。また、Lee（2019）は、日本の高校生向け EFL 教科書を分析対象とし、男女の登場人物が関係づけられる過程タイプ（process type; Halliday & Matthiessen, 2014）や異性間会話における発話量および言語機能の男女間の違い（Leech, 1981）などを分析することにより、上記教科書のジェンダー表象における隠れたカリキュラムを解明しようとする。分析の結果、前者に関しては、男性登場人物は物質過程、女性登場人物は関係過程と関係づけられること、後者に関しては、教科書間で発話量に違いがあるものの、男性は情報を提供する一方、女性は情報を要求する傾向にあり、女性よりも男性のほうが知識が豊富であるかのように表象されていることを明らかにした。

そして、筆者は Sunderland（2015）の視座に依拠しながら、これまで平成 28 年度版文部科学省検定済中学校英語教科書における、タイプとトークン、視覚資料およびマルチモダリティ、そしてセクシュアリティ表象の研究を行ってきた（稲永, 2022, 2023a, 2023b）。鈴木（2005）や Lee（2019）のように、登場人物が関係づけられる過程タイプやこれらの登場人物が遂行する言語機能を明らかにすることにより、結果の異種混交性を実現することが可能になると想定される。しかしながら、Halliday の機能文法の考え方を踏襲した van Leeuwen（2008）に依拠した、日本の英語教科書における社会的行為者および社会的行為の表象研究は今のところ見当たらない（本稿が機能文法ではなく van Leeuwen（2008）に依拠する理由に関しては、4.2 節を参照）。そこで、

本稿は、批判的ディスコース分析を理論的視座とし、さらに van Leeuwen (2008) の社会的行為者論を援用しながら、上記中学校英語教科書における物語文において、男女の登場人物がどのように表象されているのかを分析し、その結果としてジェンダーにかかわる隠れたカリキュラムが現存し、固定的な女性像および男性像、つまりジェンダー・イデオロギーが読者に暗示されているかどうかを検証する。

3. 理論的枠組み

—批判的ディスコース分析 (critical discourse analysis) —

本稿は、批判的ディスコース分析 (critical discourse analysis, 以降 CDA とする) を理論的枠組みとして援用する。CDA とは、「社会的な権力支配の(再)生産における談話の役割に焦点を当てた」(野呂, 2001, p. 17) 談話分析研究のことである。そして、この分析は、言語使用としてのディスコースに埋め込まれた支配的なイデオロギー (たとえば、社会的あるいは政治的イデオロギー、ジェンダー・イデオロギー) の表出、また差別や支配といった不平等な権力関係などを明確化することを目的としている。

CDA は、ディスコースを、社会的実践 (social practice) の一形態、すなわち世の中を表象するだけにとどまらず、世の中を構築する実践 (Fairclough, 1992, p. 64) という広範な概念として解釈する。このことは、社会的実践としての言語使用がある事柄を所与の事実として伝達するだけでなく、それを事実としてつくり上げることにより、「ディスコースのなかで同意が達成され、イデオロギーが伝達され、実践、意味、価値そしてアイデンティティが教えられて学習される」(Fairclough, 2010, p. 53) ことを意味する。また、CDA がディスコースを「社会的実践としての言語」(Fairclough & Wodak, 1997) としてとらえる場合、ことばの社会的、文化的、歴史的コンテクストの考察も必要不可欠となる。

そして、CDA は、ある特定の決まった理論や研究方法をもつ学派を指すわけではない。むしろ、問題志向の、学際的な研究動向のことである (Fairclough

et al., 2011; Wodak & Meyer, 2016)。したがって、CDA を実践するための唯一の方法というものが存在するわけではなく、CDA を実践する研究者は、ディスコースを批判的に検証するためにさまざまな手法やアプローチのなかから、それぞれの研究目的に適したものを選択する (Fairclough et al., 2011, p. 357; van Dijk, 2015, p. 466)。そこで、本稿は、2 章で述べたとおり、平成 28 年度版文部科学省検定済み中学校英語教科書の物語文において、男女の登場人物がどのように表象されているのかを分析するために、van Leeuwen (2008) の方法論を援用する。

4. データと方法論

4.1 データ

本稿は、平成 28 年度版文部科学省検定済み中学校英語教科書 6 種を分析対象とする。これらの 6 社から出版されている教科書はそれぞれ中学 1 年用から 3 年用まで 3 冊から構成されている (各学年に 1 冊) ことから、本稿は合計 18 冊の中学校英語教科書を分析する。以下の表 1 では、各教科書のタイトル (アルファベット順に記載) および出版社名を記している：

表 1 平成 28 年度版文部科学省検定済み中学校英語教科書の教科書タイトルおよび出版社

教科書タイトル (略式)	出版社
<i>COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE (CO)</i>	光村図書出版株式会社
<i>NEW CROWN ENGLISH SERIES (NC)</i>	株式会社三省堂
<i>NEW HORIZON English Course (NH)</i>	東京書籍株式会社
<i>ONE WORLD English Course (OW)</i>	教育出版株式会社
<i>SUNSHINE ENGLISH COURSE (SE)</i>	開隆堂出版株式会社
<i>TOTAL ENGLISH (TE)</i>	学校図書株式会社

上記中学校英語教科書は、主要登場人物による対話場面を中心とした課から構成されており、それぞれの課の最後には、登場人物による対話場面のほ

かに、文法問題、リスニング問題、ライティング問題などが追加されている。また、学年が上がるにつれて、対話場面の代わりに、登場人物による授業内でのスピーチ、手紙やメールの文面、さらには有名人によるスピーチや有名人の伝記などが含まれることが多くなる。

本稿は、平成 28 年度版文部科学省検定済中学校英語教科書におけるリーディング教材を分析対象とする。そのなかでも、物語文を選択し(会話のみ(あるいは中心)のもの、スピーチ形式のもの、日記などを除く)、これらの物語文における、社会的行為者としての女性登場人物および男性登場人物の表象を分析する。また、本稿では、人間の登場人物に限定し、人間でない登場人物に関する表象は分析対象外とする。

4.2 方法論—van Leeuwen (2008) の社会的行為者論—

本稿は、4.1 で概説したデータを分析するために、van Leeuwen (2008) の社会的行為者という概念を援用し、中学校英語教科書の物語文について、男女の登場人物の表象を分析し、その表象には女性像および男性像に関するジェンダー・イデオロギーが働いているのか否か、そして働いている場合には、どのようなイデオロギーであるかを考察する。

Van Leeuwen (2008, p. 4) は、バジル・バーンステイン (Basil Bernstein) の再コンテクスト化 (recontextualization) という社会的概念にもとづいて (Bernstein, 1981, 1986)、ディスコースを社会的実践の再コンテクスト化とみなしている。そして、社会的実践を再コンテクスト化する過程、つまり社会的実践の変形 (transformation) は、社会的実践がディスコース群に変えられるときに発生し (van Leeuwen, 2008, 2016)、「世の中や現在起こっていることについての表象はどんなものであれ、どんなに抽象的であっても、社会的実践の表象として解釈することができる」(van Leeuwen, 2008, p. 5)。しかしながら、人々がある出来事について話をしたり、文章を書いたりする際、ディスコースのなかにその出来事に関するあらゆる要素を包含するわけではない (実際には、そのこと自体不可能であろう)。人々は、言語的変異を社会的に組織立て、そして制御する「ディスコースの秩序 (orders of discourse)」

に依拠しながら、上記の要素のなかから取捨選択を行う (Chiapello & Fairclough, 2002; Fairclough, 2010, 2015)。それゆえ、同じ社会的実践を表象するとしても、多くの異なる方法が存在し (ディスコース群の複数性; van Leeuwen, 2008, p. 6)、それらの実践を表象する方法が異なれば、表象する対象に対する解釈や態度も異なることになる。

Van Leeuwen (2008, p. 6) によると、「社会的に規制された物事のやりかた (socially regulated ways of doing things)」としての社会的実践は、以下の要素で構成されている：

- (1) 参与者 (Participants) ⁽³⁾
- (2) 行為 (Actions)
- (3) 遂行の様式 (Performance Models; 社会的行為が遂行される際の特定のやりかた)
- (4) (参与者の) 資格条件 (Eligibility Conditions (Participants))
- (5) 呈示様式 (Presentation Styles; 服装および身だしなみの条件)
- (6) 時間 (Times)
- (7) 場所 (Locations)
- (8) (場所の) 資格条件 (Eligibility Conditions (Locations))
- (9) 資源：道具および素材 (Resources: Tools and Materials)
- (10) (資源の) 資格条件 (Eligibility Conditions (Resources))

(van Leeuwen, 2008, pp. 6-12)

Van Leeuwen (2008) は、上記の要素のうち、いかなる社会的実践においても中核をなすのは、社会的行為者と社会的行為であると考え、これらがいかにテキストのなかで表象されているかに焦点を当てている。ただし、van Leeuwen は、言語学的操作やカテゴリー (例、「名詞化」や「他動性」) ではなく、社会学的カテゴリー (例、「名付け」) ⁽⁴⁾ に焦点を当てることによって、社会的行為者および社会的行為を表象する方法の、「社会意味論的目録 (sociosemantic inventory)」(2008, p. 23) を形式化する。また、なぜ言語学

的カテゴリーではなく、社会学的カテゴリーに焦点を当てるのかという問いに対して van Leeuwen は2つの理由を挙げている。まず、社会学的カテゴリーと言語学的カテゴリーのあいだに一对一の対応関係 (bi-uniqueness) が存在しない。つまり、「社会学的カテゴリーと言語学的カテゴリーがぴったり一致することは全くない」(van Leeuwen, 2008, p. 24) ということである。以下の例文について考えてみる：

People of Asian descent say *they* received a sudden cold shoulder from neighbors and co-workers.

(van Leeuwen, 2008, p. 24；強調は筆者による)

従属節における主語“they”（アジア系の人々を意味する）は、文法上は「動作主」であるものの、社会意味論的には「受益者」であり、“neighbors and co-workers”が社会意味論的には冷遇するという行為の「動作主」である。この例において、社会意味論的行為作用 (agency) は、文法的行為作用によって具現化されるわけではないと言える。このため、van Leeuwen (2008) は、言語構造や言語学的操作（例、名詞化や動作主削除など）には焦点を当てないのである (Wodak & Meyer, 2016;ただし、分析の焦点にしただけであって、分析項目として援用しないということの意味するわけではない)。また、van Leeuwen が社会学的カテゴリーに焦点を当てるもう1つの理由は、「意味が属するのは言語ではなく文化であり、[意味を] 特定の記号現象に結びつけることはできない」(2008, p. 24) という想定である。つまり、言語という記号のみに特化したカテゴリーだけでは意味を扱うことはできないのである。Van Leeuwen (2008) は、その想定にかんがみて、彼が提示するカテゴリーが全記号的 (pan-semiotic) であるべきだと主張し、そして実際に、社会的行為者および社会的行為の理論にもとづいて言語以外の記号現象も調査している。

また、社会的実践を再コンテクスト化する過程において発生する変形として以下のものが挙げられている：

- (1) 代用 (substitution : 実際の社会的実践の要素を記号的要素で代用すること)
- (2) 削除 (deletion)
- (3) 再配置 (rearrangement)
- (4) 追加 (additions : 繰り返し、反応、目的、正当化 (社会的実践の表象に「なぜ」を追加すること)、そして評価)

(van Leeuwen, 2008, pp. 17-21)

Van Leeuwen (2008) は、社会的実践を変形する (つまり、表象する) 上記の方法を基盤として、社会的行為者および社会的行為者を再コンテキスト化する過程を詳細にカテゴリー化している。これらの変形を利用することにより、オーサー (author) は、さまざまな方法で社会的実践を構成する要素を包含したり、あるいは排除したりすることができる。以下では、社会的行為者が表象される際に、どのような選択がなされるのかについて概説する。

社会的行為者を表象する際、まずはディスコースのなかに包含 (inclusion) されるのか、あるいは排除 (exclusion) ⁽⁵⁾ されるのかに関する選択がなされる。そして、排除される場合には、隠蔽 (suppression) あるいは背景化 (backgrounding) の選択がなされる。隠蔽の場合、社会的行為者はテキストのどこにも言及されることはなく、その行為者による行動のみが言及される。一方、背景化の場合、社会的行為者は、当該行為に関しては排除されているものの、テキスト内の別のどこかで言及されているのである。

そして、社会的行為者が包含される場合、まずは以下の2つの選択がなされる : (1) 役割割り当て (role allocation) と (2) 人間化 (personalization) / 非人間化 (impersonalization) である。まず、役割割り当てとは、社会的行為者が表象のなかでどのような役割が割り当てられるのかにもとづく再コンテキスト化のことである。つまり、誰が「動作主」として表象されるのか、誰が「受益者」として表象されるのかに関わる問題である。つぎに、人間化 / 非人間化とは、社会的行為者が人間として表象されるのか、あるいは人間の意味特性を含まない抽象名詞や固有名詞によって、人間以外のものとして

表象されるのかに関わる再コンテキスト化のことである。

ここでは、人間化の後に選択される下位カテゴリーである確定化 (determination) / 非確定化 (indetermination)、人間化と非人間化のどちらにも当てはまる総称化 (genericization) / 特定化 (specification)、そして非人間化の後に選択される下位カテゴリーである抽象化 (abstraction) / 物体化 (objectivation) について概説する。

まず、確定化とは社会的行為者のアイデンティティを何らかの手段で特定するプロセスである一方、非確定化とは社会的行為者を特定することなく、不定代名詞などを使用することにより、匿名の行為者として表象することである (確定化にはかなりの種類の下位カテゴリーが存在するため、本稿では分析の際に必要なに応じて下位カテゴリーの解説を行う)。そして、人間化と非人間化のどちらのプロセスにおいても生じうる総称化においては、社会的行為者は総称的集団として表象され、特定化のプロセスでは、社会的行為者は特定の個人／集団として表象される。最後に、非人間化のあとに選択される抽象化と物体化である。抽象化が社会的行為者をその人に割り当てられた性質にもとづいて表象するプロセスあるのとは対照的に、物体化は、社会的行為者をその人／その人が従事する行為と密接に関係する場所、あるいは事物によって表象するプロセスのことである (ディスコースにおける社会的行為者の表象ネットワークに関しては、van Leeuwen (2008, p. 52) を参照)。

5. 分析と考察

5.1 役割割り当て (Role Allocation)

本節では、「動作主」あるいは「受益者」のうちどちらの役割が社会的行為者に割り当てられているのかを見ていく；前者は作用化 (activation)、後者は受動化 (passivation) である。ただし、今回分析対象とする物語文において、女性あるいは男性登場人物に対して、どちらか一方の役割だけが割り当てられているわけではない。どちらにも「動作主」および「受益者」の役割がコンテキスト (context) に応じて割り当てられている。そこで、本節では、女

性登場人物と男性登場人物が一緒に登場する場面に注目する。以下のデータは、帽子をなくした主人公 George Pavlides が、その帽子を追い求めてアメリカに向かう場面の一部である（以降、データ上の下線は筆者による）：

(1) When George made enough money after several journeys to America, he got off the ship in America with his wife. (Extensive Reading 3: The Hat in SS 3)

George は、アメリカに向かう船で働いている最中に Sophia という女性と出会う。そして、Sophia と結婚した George はともにアメリカに降り立つのである。ここでは、Sophia は、George とともに「アメリカで船を降りる (got off the ship in America)」という社会的行為における「動作主」として表象されている。Sophia は「動作主」、つまり能動的役割を果たす存在として表象されているものの、参与化 (participation；社会的行為者に文法上参与者の役割を付与すること) にもとづく George の表象とは対照的に、ここでは状況化 (circumstantialization) が作用している。状況化とは、役割割り当ての下位カテゴリーの 1 つであり、能動的・受動的役割を果たす社会的行為者を状況として再コンテクスト化することである (例、前置詞句 “by” など)。Sophia は、“George and Sophia” といったように関連化 (association；5.3 を参照) されるのではなく、「アメリカで船を降りる」George (主語に位置づけられているため、焦点が当てられている) に付随する「状況」、つまり George と比較してあまり焦点の当たらない存在として表象されていることになる。

つぎは、女性登場人物を「受益者」とする表象に注目する。社会的行為者が受動化にもとづいて「受益者」として表象される場合、従属化 (subjection；社会的行為者を行為の対象として表象すること) あるいは受益化 (beneficialization；社会的行為者を、肯定的であれ否定的であれ、その行為から利益を受ける第三者として表象すること) のプロセスが生じる。(2) は、ニューヨークに住む青年 Rudolf がとある歯科医院の看板の前で、チラシ配り

の男から1枚のカードを受け取る物語の一部である：

(2) She began to fall, but Rudolf caught her in his arms and carried her to a sofa in the room. (Let's Read 2: The Green Door in NH 3)

“The Green Door”と書かれたカードをチラシ配りの男から受け取った主人公 Rudolf は、歯科医院と複数の店舗が入っている建物の、3階にあるドアが緑色の部屋に入る。すると、そこに立っていた若い女性が倒れそうになっていた。ここでは、主人公 Rudolf は、「自分の腕で彼女をつかまえ (caught her in his arms)」て、「部屋のソファまで彼女を運ぶ (carried her to a sofa in the room)」という社会的行為における「動作主」として表象されている。対照的に、この倒れそうになった若い女性は、「つかまえる」および「運ぶ」という行為の対象として表象されている。つまり、若い女性は上記の社会的行為において従属化されているのである。

最後に、「求婚 (あるいは、結婚) する」という社会的行為に関して、社会的行為者である男女の登場人物に割り当てられる役割の非対称性に注目する：

(3) Jimmy asked her to marry him, and she accepted. (Further Reading 2: Jimmy Valentine in NC 3)

(4) He married her. (Extensive Reading 3: The Hat in SS 3)

(3) は、それまで金庫破りをしていた主人公 Jimmy Valentine が、新天地で友人になった Susan Adams という女性に求婚をし、彼女が受け入れた場面である。「求婚する」という社会的行為には、「求婚する側」と「求婚される側」という2種類の社会的行為者の存在が必要となる。そのため、Jimmy に「動作主」の役割が付与されることにより、Susan には「受益者」としての役割が自動的に付与されることになる (Susan は「受け入れる (accepted)」という行為における「動作主」として表象されているものの、これは「求婚する」という行為に付随して生じた結果である)。また、(4) は、帽子をなく

した George Pavlides が Sophia という女性と結婚した場面である（(1) の少し前の出来事である）。ここでは、George と Sophia を関連化させ、“George and Sophia got married” といった再コンテキスト化を行うことによって、2 人が対等な関係にある存在として表象することも可能である。しかしながら、ここでは、他動詞 “marry” を能動態で使用するにより、Sophia には受動的な役割が付与されることになる。このように、「求婚（あるいは、結婚）する」という社会的行為の表象において、女性登場人物の受動性および男性登場人物の能動性が示唆されているのである。

5.2 カテゴリー化 (Categorization) と名付け (Nomination)

社会的行為者の確定化のプロセスには、カテゴリー化 (categorization) や名付け (nomination) などの下位プロセスがある。そして、社会的行為者がカテゴリー化 (社会的行為者を他者と共有するアイデンティティや機能にもとづいて表象すること) される場合、機能化 (functionalization)、アイデンティフィケーション (identification)、そして評価 (appraisal) というプロセスが生じる。そのなかで、アイデンティフィケーションが生じる場合、社会的行為者は、分類 (classification)、関係的アイデンティフィケーション (relational identification)、あるいは身体的アイデンティフィケーション (physical identification) にもとづいて再コンテキスト化される。

また、名付け (社会的行為者をその人特有のアイデンティティにもとづいて表象すること) のプロセスの場合、フォーマルさの有無、肩書の有無によって違いが生じてくる。フォーマルさに関しては、姓のみで表象される場合 (フォーマル化: formalization)、姓と名前で表象される場合 (半フォーマル化: semiformalization)、そして名前のみで表象される場合 (インフォーマル化: informalization) がある。各プロセスに関する関係性は図 1 のとおりである：

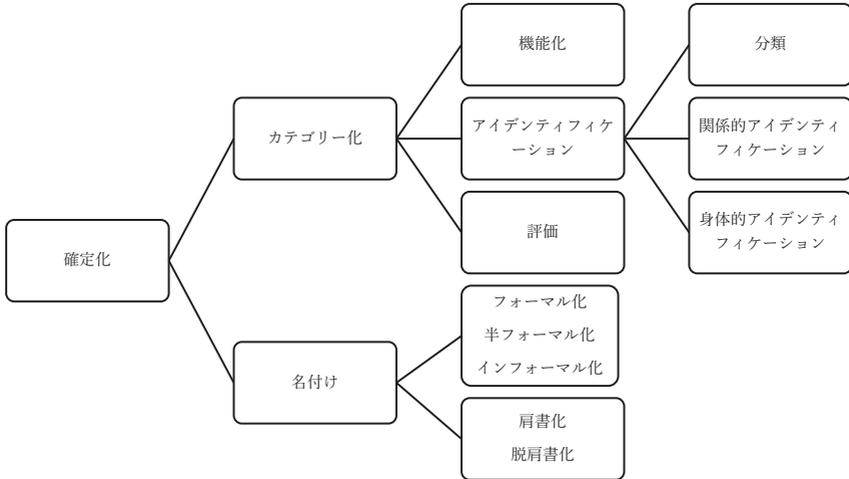


図1 カテゴリー化と名付けのプロセス

まずは、関係的アイデンティフィケーション（社会的行為者を個人、親族、職場関係にもとづいて表象すること）およびインフォーマル化にもとづく表象に注目する。以下は、1939年にリトアニアの日本領事館の領事代理に任命された杉原千畝の妻（幸子）の表象である：

(5) “Who are they?” asked his wife, Yukiko. (Let’s Read 2: Visas for 6,000 lives in CO 3)

ここでは、幸子は、杉原千畝に「あの人たちは誰？（Who are they?）」と質問をしているが、この行為の社会的行為者である幸子は、杉原千畝との夫婦関係にもとづいてどのような人物であるかが表象されている（“his wife”）。女性である幸子が、夫を基準とした関係にもとづいて表象されているということは、夫（つまり、杉原千畝）が無標（unmarked）の基準となる存在として捉えられていることを示唆している。また、フォーマルさの観点からみると、幸子は姓が付与されたかたちで表象されることはなく（“Sugihara Yukiko”）、インフォーマル化により、名前のみ（“Yukiko”）で表象されている。このことは、リトアニアの日本領事館領事代理である千畝が、（家庭の外とい

う限定的な意味において) フォーマルな立場の存在として位置づけられているのとは対照的に、幸子がフォーマルな立場にいないことを示唆している。女性登場人物が関係的アイデンティフィケーションやインフォーマル化によって表象されている他の事例を以下に提示しておく：

(6) Sawyer's mother hugged him. (Let's Read 1: Dolphin Tale in *NC 3*)

(7) Very slowly the plane took off, but the geese did not follow it; they just followed Amy, their "mother." (Reading 2: Fly Away Home in *TE 3*)

(8) Megumi had a lot of stuffed animals. (PROGRAM 12: Her Dream Came True in *SS 2*)

(7) は、自分のことを親鳥と勘違いをしたガチョウたちが飛び立てるように尽力した主人公 Amy とそのガチョウたちに関する表象である。両者は、それぞれ人間と鳥であることから、親子関係にあるわけではないものの、関係的アイデンティフィケーションにもとづいて、疑似的な親子関係にあると見立てられ、Amy はガチョウたちの括弧付きの「母親 ("mother")」として表象されている。また、(8) では、父親が果たせなかった夢 (海外を旅すること) を果たすために、自分のぬいぐるみのマックに世界旅行をさせた主人公 Megumi は、(彼女の手紙のなかでは姓が記載されているものの) 物語の序盤から名前のみで表象されている (つまり、インフォーマル化)。そして、以下は、関係的アイデンティフィケーションにもとづいて表象された男性登場人物の事例である：

(9) Mr. Adams, Susan's father, bought a new safe for his bank. (Further Reading 2: Jimmy Valentine in *NC 3*)

(10) The next day, Amy's father said, "I've got an idea, Amy! I'll make a plane for you then I'll teach you how to fly it. The geese will follow you and fly." (Reading 2: Fly Away Home in *TE 3*)

(9) の下線部は、金庫破りをしていた主人公 Jimmy Valentine が出会った女性 (Susan Adams) の父親、そして (10) の下線部は、(7) で登場した主人公 Amy の父親に関する表象である。男性登場人物の場合、女性登場人物と比較して、関係的アイデンティフィケーションは少ないものの、このタイプの再コンテクスト化が生じる場合は、「夫婦関係」よりも「親子関係」にもとづく表象が多い。

つぎに、機能化と名付けにもとづく男性登場人物の表象に注目する。男性登場人物の場合、機能化 (社会的行為者をその人が行うこと (例、職業、役割) にもとづいて表象すること) にもとづいて再コンテクスト化がなされる場合が多い。以下は、ロボットとの共存をテーマとしたリーディング教材の一部である：

(11) Dr. Sankai Yoshiyuki, a scientist, became really interested in robots even as a child. (Let's Read 2: Living with Robots in CO 2)

(11) の下線部では、まず、“Sankai Yoshiyuki”の後に“scientist” (科学者) が配置されている。仕事上の業務内容を提示する機能化プロセスにより、ロボットスーツを開発した山海嘉之教授が仕事上どのようなことをしているかを表象することが可能となる。また、ここでは、名付けのプロセスに関して、フォーマルさと肩書の両方に関する再コンテクスト化もなされている。まず、フォーマルさに関して、山海教授は、姓と名前の両方 (“Sankai Yoshiyuki”) を使用することにより、いくぶんフォーマルな存在として表象されている (半フォーマル化)。また、肩書に関しては、肩書化 (titulation)、とくに敬称化 (honorification : 社会的行為者に敬称などをつけて表象すること) が作用している。ここでは、敬称である “Dr.” を使用することにより、山海教授の研究者としての立ち位置を示し、さらに敬意を示すことが可能となる。そして、以下は、社会的行為者としての男性登場人物の表象において、機能化、半フォーマル化、そして敬称化 (の一部) が作用している類例である：

(12) Amemiya Kiyoshi, the president of a construction machinery company, visited Cambodia on business in 1994. (Let's Read More 1: No More Landmines in *CO 3*) →半フォーマル化、機能化

(13) But, Dr. Kubodera Tsunemi, a Japanese marine biologist, is trying to find out how giant squid live. (Let's Read More 2: The Most Valuable 23 Minutes in *CO 3*) →敬称化、半フォーマル化、分類化、機能化

(14) But the photographer took a photograph instead of helping her right away. (Further Reading 1: A Vulture and a Child in *NC 3*) →機能化

(15) According to Kubodera Tsunemi, the team leader, the giant squid was just beautiful. "I was thrilled when I saw it with my own eyes." (Optional Reading 2: Giant Squids in *OW 3*) →半フォーマル化、機能化

また、機能化にもとづく女性登場人物の再コンテキスト化にも注目する。以下の (16) は、パキスタン出身のフェミニストであり、人権活動家であるマララ・ユスフザイ (Malala Yousafzai) に関する表象である：

(16) This is a story about Malala Yousafzai, a Pakistan schoolgirl. She gave a speech at the United Nations on her 16th birthday, July 12, 2013. (PROGRAM 9: Education First: Malala's Story in *SS 3*) →半フォーマル化、分類、機能化

(16) は、マララ・ユスフザイに関する物語文の冒頭である。ここでは、主人公 "Malala Yousafzai" は、「女子生徒 (schoolgirl)」として表象されている。これは彼女が普段携わっている社会的行為 (学校で勉学に励む行為) にもとづく表象であることから、機能化が作用していると言える。ただし、ここでは、"schoolchild" あるいは "schoolkid" といった総称的な語彙項目の不使用が注目しに値する。たとえば、これらの総称的な語彙項目をすることにより、女子生徒と男子生徒 (schoolboy) を差異化 (differentiation: 個々の社会的行為者

あるいは社会的行為者集団を類似した行為者あるいは集団から差異化し、「自己」と「他者」、つまり「私たち」と「彼（女）ら」の間に差異を生じさせること）することなく、マララ・ユスフザイを生徒として表象することも可能である。しかしながら、あえて女子生徒（schoolgirl）を“schoolchild”あるいは“schoolkid”のなかから抽出し、男子生徒（schoolboy）と差異化させている。このことは、この後の主題、つまりパキスタンにおいて生じている女性差別（“In addition, girls could not go to school freely.” や “In her society, girls could not choose jobs freely.”）を前景化することにつながると考えられる。また、(16) や以下の (17) のように、女性登場人物が機能化にもとづいて再コンテキスト化されることはあまりない：

(17) In the meeting, he will meet two people: Mr. Phan, a fashion designer from Vietnam, and Ms. Napaporn, a magazine editor from Thailand. (Reading 1: English for International Communication in *TE 2*)

最後に、評価という再コンテキスト化のプロセスにもとづく男女登場人物の表象に注目する。評価とは、社会的行為者を経験ではなく、対人関係の観点から表象すること、そして社会的行為者を良い・悪いといった評価にもとづいて評価するプロセスである。まず、(18) は、(1) そして (4) と同じ “The Hat” からの引用である：

(18) While he was working on the ship, he met a beautiful, warm-hearted Greek girl. Her name was Sophie. (Extensive Reading 3: The Hat in SS 3)

ここでは、主人公 George Pavlides が船の中で出会った女性 (Sophia) に対して、「美しくて、あたたかい心を持っている (beautiful, warm-hearted)」と肯定的な評価が下されている；また、評価だけでなく、身体的アイデンティフィケーション⁽⁶⁾ および分類（ある社会や組織が人々の集団を区分する際

に使用するカテゴリー（性別、階級、年齢など）にもとづいて社会的行為者を表象すること）も作用している。とくに、「あたたかいこころを持っている（warm-hearted）」から、Sophiaが「女は優しく、静かで、情緒的」といった女らしさに通ずると想定される特性が備わった存在として表象されていることがわかる。一方、次の(19)と(20)は男性登場人物に対する評価の事例である。男性登場人物の場合、対人関係のスキル（つまり、その人がどのような人物であるのか）というよりも、その人自身が持つ能力やらしさにおいて評価される場合が多い：

(19) For example, in *Black Jack*, the hero is a skillful doctor and can cure any disease or serious injury. (Reading Lesson 2: The Gift of Tezuka Osamu in *OW 2*)

(20) With these words, he became a hero to many people both in Africa and around the world. (Let's Read 2: We Can Change Our World in *NC 3*)

(19) は、漫画家手塚治虫の幼少期以降に関する物語文の一部である。ここでは、手塚治虫原作の漫画『ブラック・ジャック』の主人公ブラック・ジャックこと間黒男（はざまくろお）が、「ヒーロー（the hero）」、つまり“a man who is admired for doing something extremely brave” (*Longman Dictionary of Contemporary English*, 6th ed.) として表象されている。ブラック・ジャックをヒーローとして表象することは、彼を肯定的に良いものとして評価することにつながる。ただし、ブラック・ジャックは「無免許の」天才外科医であり、無免許で医療業務に携わることは現実的には犯罪である。それにもかかわらず、彼を「ヒーロー（the hero）」と評価することは、法に則らず、罪を犯したとしても、人を助けるという行為が英雄的であるという前提にたっているからであり、それゆえ「法の外のヒーロー」（河野, 2023）としてブラック・ジャックを描いているのではないかと考えられる（これは、女性登場人物には適用されない評価の仕方である）。ここでは、ブラック・ジャックの能

力観（無免許であるにも関わらず外科手術能力が天才的である）、そして彼の男らしさ（勇気がある）が示唆されているのである。また、(20) は、アフリカのマラウイ共和国に住み、わずか 14 歳にして風車を製作したウィリアム・カムクワンバ（William Kamkwamba）が、インタビューにおいて、つたない英語で “I try, and I made it.” と伝えたことにより、ヒーロー（a hero）になったことが示されている場面である。ここでも、ウィリアムをヒーローとする表象は、彼の対人関係的スキルに対する評価ではなく、学校に通うことができなかつたにも関わらず、その状況に屈することなく風車製作に挑戦し、それを成し遂げたウィリアムの実践に対する評価に依拠している。このほかに、男性登場人物を評価している表象には以下のようなものがある：

(21) George’s cinema became the best cinema in the city, and he became an important man in the film business. (Extensive Reading 3: The Hat in SS 3)

(22) This made him a big star. (Lesson 5: Stevie Wonder—The Power of Music in TE 3)

(21) では、George Pavlides が映画事業で重要な人物（an important man）となったこと、そして (22) では、アフリカ系アメリカ人の音楽家であるステイーヴィー・ワンダー（Stevie Wonder）が 13 歳の時にリリースした初のアルバムにより、大スター（a big star）になったことが示されている。このように、男性登場人物は、その人が対人関係においてどのような人物であるのかではなく、その人が仕事上（あるいは、成長過程において）どのようなことを成し遂げたのかという観点から評価されている。つまり、女性登場人物と男性登場人物のあいだで評価という再コンテキスト化における差異（具体的には、各登場人物の「どのような点」を評価するのかにおける差異）が存在するのである。

5.3 関連化 (Association)

最後に、本節では、男女登場人物を表象する際に作用する関連化のプロセスに焦点を当てる。社会的行為者が確定化される場合、カテゴリー化、名付け以外に、(複数の社会的行為者が存在する場合) 関連化されるか否かの選択もなされる。関連化とは、社会的行為者そして／あるいはその集団を並列(parataxis) などによってグループとして表象するプロセスのことである。以下の (22) から (24) は関連化の事例である：

(22) Collecting wood is hard work, especially for women and children.
(Let's Read 3: Cooking with Sun in *NH 2*)

(23) On September 4, Sugihara and his family had to leave for Berlin.
(Let's Read 2: Visas for 6,000 lives in *CO 3*)

(24) To save money, William and his family went to bed when it got dark. (Let's Read 2: We Can Change Our World in *NC 3*)

(22) は、電気もガスもない高山で、食べ物を温め、調理する際に使用されるソーラー・クッカー(solar cooker)を取りあげた物語文の一場面である。「材木を集める(Collecting wood)」という社会的行為を遂行する社会的行為者は、作用化および前置詞“for”を使用した状況化により、女性および子ども(women and children)であると表象されている。さらに、接続詞“and”を使用した並列により、女性と男性ではなく、女性と子どもが関連化されていることが注目に値する。この関連化により、材木を集めるという重労働において、男性がこの社会的行為を遂行する社会的行為者の集団から除外されることになる。このことは、男性がこのような重労働(また、エッセンシャル・ワークでもある)に従事する必要のない、特権的な存在として認識されていることを可視化する。

また、(23) および (24) では、「杉原千畝(Sugihara)」とわずか14歳で風車を製作した「ウィリアム(William)」が接続詞“and”により「彼の家族(his family)」と関連化されている。このことにより、これらの社会的行為者は、

1つの社会的行為（それぞれ、ベルリンへ出発すること、そして暗くならんと就寝すること）に携わる1つの集団として表象されることになる。ただし、それだけでなく、杉原千畝およびウィリアム・カムクワンバ以外の家族構成員を1つの集団（his family）として表象することは、杉原千畝およびウィリアム・カムクワンバと彼らを除く家族構成員を差異化する、つまり、別々の集団とする再コンテクスト化にもつながる。この再コンテクスト化は、杉原千畝およびウィリアム・カムクワンバとそれ以外の家族構成員のあいだに立場上の違い（たとえば、リトアニアの日本領事館の領事代理という公的立場にある人とそうでない人たち）あるいは能力上の違い（リトアニアで何千人もの人のためにビザを発給したこと、そしてわずか14歳で風車を製作したこと）と呼応しているのではないかと考えられる（無論、主人公とそれ以外の人という差異化とも呼応しているだろう）。

6. 結論

本稿は、批判的ディスコース分析（critical discourse analysis, CDA）を理論的視座として、van Leeuwen（2008）の社会的行為者に関する分析的枠組みを援用して、平成28年度版中学校英語教科書の物語ジャンルにおける男女登場人物の表象を分析してきた。

分析の結果、役割割り当てに関しては、女性登場人物および男性登場人物ともに、文脈に応じて、作用化されたり、受動化されたりしていた。しかし、女性登場人物と男性登場人物が一緒に登場する場面では、男性は作用化される一方、女性は受動化される傾向にあった（たとえば、「求婚（あるいは、結婚）する」社会的行為など）。それゆえ、この結果は、社会的行為における女性の受動性および男性の能動性、つまり固定的な女性像および男性像（ジェンダー・イデオロギー）を示唆している。

そして、カテゴリー化および名付けに注目すると、女性登場人物は関係的アイデンティフィケーションおよびインフォーマル化により再コンテクスト化される一方、男性登場人物は機能化、そしてフォーマル化／半フォーマル

化により再コンテキスト化される傾向にあった。とくに、女性登場人物の表象では、職場関係よりも家族関係によるアイデンティフィケーションが作用していたことから、女性登場人物は私的領域と、そして男性登場人物は公的領域と関連づけて認識されていることがわかる。また、女性登場人物が、(無標となる)男性登場人物との関係にもとづいた社会的行為者として表象される場合、女性登場人物がフォーマルな立場にいない存在として認識されていることも明らかとなった。そして、評価に関しては、女性登場人物は対人関係(どのような人であるのか)の観点から、男性登場人物は仕事(どのようなことをする人なのか)の観点から表象されていた。

最後に、関連化に関しては、重労働を遂行する社会的行為者として、大人の女性登場人物と男性登場人物が等しく表象されているわけではなく、大人の女性登場人物と子どもが等価の存在として関連づけられていた。また、男性登場人物は自らの家族と関連化されていたが、その家族を“family”と表象することにより、男性登場人物と家族の差異化が生じていることもわかった。

結果として、本稿は、平成28年度版中学校英語教科書の物語文における男女登場人物の表象において、「女性は受動的で、男性は能動的である」、「女性は私的領域に属し、男性は公的領域に属する」といった女性像および男性像に関わるジェンダー・イデオロギーが読者に提示される傾向にあることを明らかにしてきた。ただし、本稿は定性分析を行っているため、全体的な傾向を浮き彫りにすることはできない。社会的行為者としての男女登場人物がどの再コンテキスト化のプロセスによって表象されているかを分類した結果を数値データ化して定量分析を行えば、全体的な傾向を示すことができるだろう。また、今回は、社会的行為者としての男女登場人物の表象に注目したが、男女登場人物が遂行する社会的行為の表象も検証する必要があるだろう。たとえば、作用化にもとづいて社会的行為者を表象した場合、社会的行為者は「動作主」として表象されることになる。ただし、社会的行為の分析方法に依拠して、どのような社会的行為(反応)において、その社会的行為者が「動作主」として表象されるのかを明らかにする必要がある。そうすることにより、「女性は受動的で、男性は能動的である」といった女性像および男性像に

関わるジェンダー・イデオロギーがより具体的なイメージを帯びることになるだろう。

注)

- (1) 本稿は、2021年10月24日(日)にオンラインで開催された一般社団法人日本メディア英語学会第11回大会(旧社団法人日本時事英語学会通算第63回大会)における研究発表「中学校英語教科書の物語文における男女の表象—社会的行為者(social actors)および社会的行為(social actions)に注目する—」の発表原稿における社会的行為者の分析部分に加筆修正を施したものである。
- (2) 言語学的分析以外の分析的側面に関して、Sunderland(2015)は以下のように言及する: タイプとトークン(誰を、どのくらいの頻度で(そして、どのように)教科書のなかに含めるのか)、サブジャンル(外国語教科書ジャンルに含まれるサブジャンル、女性・男性/女子・男子が表象される主題上の文脈あるいは領域)、人間でない登場人物(低学年向け教科書において、人間ではない登場人物が人間に関する意味においてジェンダー化されているか否か)、視覚資料およびマルチモダリティ(視覚化されている男女の数、男女の表象の仕方、視覚形態、そして多様なモード間の相互作用)、そしてセクシュアリティの表象(異性愛(規範)に関わる表象)である。
- (3) 「参与者(Participants)」は、van Leeuwen(2016)においては「行為者(Actors)」として提示されている。
- (4) 社会的カテゴリーは、さまざまな方法を用いて、言語学的に、そして修辞学的に具現化されている。
- (5) Van Leeuwenは、隠蔽および背景化を含めて、3タイプの排除を提示している。残りの1つは、根本的排除(radical exclusion)である。根本的排除の場合、社会的行為者およびその社会的行為は両者とも排除され、その結果社会的実践の表象のなかにはどちらの手がかりも残されていない。そのため、根本的排除の場合、ある社会的実践に関する1つの表象を分析するだけでは社会的行為者(および、それによる社会的行為)を特定することはできず、同じ社会的実践に関する異なった複数の表象を比較する必要がある(van Leeuwen, 2008, p. 29)。
- (6) 「美しい(beautiful)」は、身体的アイデンティフィケーション(社会的行為者がある文脈のなかでその人を特定する身体的特徴にもとづいて表象すること)にもとづく再コンテキスト化である。今回分析対象とする中学校英語教科書の物語文において、女性登場人物も男性登場人物も、身体的アイデンティフィケーションにもとづいて再コンテキスト化されることがある。ただし、両者に

対して同じように適用されている身体的アイデンティフィケーションは、背が高いか低いかという身体的特徴の表象である：“Is that you, Bob?’ the tall man asked.” (Extensive Reading 1: After Twenty Tears in SS 3) や “A mother was singing to her little girl under the tree.” (Let’s Read 1: A Mother’s Lullaby in NH 3)。つまり、女性登場人物にのみ「美しさ」という身体的特徴の表象がなされているということは、女性に対するルッキズム (lookism) が影響している可能性を示唆している。

参考文献

- Bernstein, B. (1981). Codes, modalities and the process of cultural reproduction: a model. *Language and Society*, 19, 327-363.
- Bernstein, B. (1986). On pedagogic discourse. In J. Richardson (ed.), *Handbook for Theory and Research in the Sociology of Education* (pp. 205-290). Greenwood.
- Chiapello, E. & Fairclough, N. (2002). Understanding the new management ideology: a transdisciplinary contribution from critical discourse analysis and the new sociology of capitalism. *Discourse & Society*, 13 (2), 185-208.
- Clark, I. (2016). A qualitative analytic case study of subliminal gender bias in Japanese ELTs. *SAGE Open*, 6 (3), 1-8.
- Fairclough, N. (1992). *Discourse and Social Change*. Polity Press.
- Fairclough, N. (2010). *Critical Discourse Analysis: The Critical Study of Language* (2nd ed.). Longman.
- Fairclough, N. (2015). *Language and Power* (3rd ed.). Longman.
- Fairclough, N. & Wodak, R. (1997). Critical discourse analysis. In T. van Dijk (ed.), *Discourse and Social Interaction* (pp. 258-284). SAGE.
- Fairclough, N., Mulderrig, J., & Wodak, R. (2011). Critical discourse analysis. In T. van Dijk (ed.), *Discourse Studies: A Multidisciplinary Introduction* (2nd ed.; pp. 357-378). SAGE.
- Halliday, M. & Matthiessen, C. (2014). *Halliday’s Introduction to Functional Grammar*. Routledge.
- Hartman, P. L. & Judd, E. L. (1978). Sexism and TESOL materials. *TESOL Quarterly*, 12 (4), 383-393.
- Jaworski, A. (1983). Sexism in textbooks. *British Journal of Language Teaching*, 21 (2), 109-113.
- Jones, M. A., Kitetu, C., & Sunderland, J. (1997). Discourse role, gender and language textbook dialogues: who learns from John and Sally? *Gender and*

- Education*, 9 (4), 469-490.
- Lee, J. F. K. (2018). Gender representation in Japanese EFL textbooks: a corpus study. *Gender and Education*, 30 (3), 379-395.
- Lee, J. F. K. (2019). In the pursuit of a gender-equal society: do Japanese EFL textbooks play a role? *Journal of Gender Studies*, 28 (2), 204-217.
- Leech, G. N. (1981). *Semantics: The Study of Meaning*. Penguin.
- Leskin, J. (2001). Determining social prominence: a methodology for uncovering gender bias in ESL textbooks. In D. R. Hall & A. Hewings (eds.), *Innovation in English Language Teaching* (pp. 275-283). Routledge.
- Mineshima, M. (2008). Gender representation in an EFL textbook. *Bulletin of Niigata Institute of Technology*, 13, 121-140.
- Nagatomo, D. H. (2010). A critical analysis of gender representation in an EFL textbook. *Journal of the Ochanomizu University English Society*, 1, 53-61.
- Nakai, M. (2001). Sex and gender in the pre- and main reading sections of high school English textbooks in Japan. *The Bulletin of Tsuru Bunka University*, 54, 83-96.
- Poulou, S. (1997). Sexism in the discourse roles of textbook dialogues. *Language Learning Journal*, 15, 68-73.
- Sunderland, J. (2015). Gender (representation) in foreign language textbooks: avoiding pitfalls and moving on. In S. Mills & A. S. Maustapha (eds.), *Gender Representation in Learning Materials: International Perspectives* (pp. 20-34). Routledge.
- Van Dijk, T. A. (2015). Critical discourse analysis. In D. Tannen, H. E. Hamilton, & D. Schiffrin (eds.), *The Handbook of Discourse Analysis* (2nd ed.; pp. 466-485). John Wiley & Sons.
- Van Leeuwen, T. (2008). *Discourse and Practice: New Tools for Critical Discourse Analysis*. Oxford University Press.
- Van Leeuwen, T. (2016). Discourse as recontextualization of social practices: a guide. In R. Wodak & M. Meyer (eds.), *Methods of Critical Discourse Studies* (3rd ed.; pp. 137-153). SAGE.
- Wodak, R. & Meyer, M. (2016). Critical discourse studies: history, agenda, theory and methodology. In R. Wodak & M. Meyer (eds.), *Methods of Critical Discourse Studies* (3rd ed.; pp. 1-22). SAGE.
- 石川有香 (1999) 「コミュニケーションの観点から見た英語話法—高等学校英語教科書に見る人称代名詞と性別の問題—」『言語文化論集』12号, 179-

- 石川有香 (2004) 「各種ガイドラインおよび高校英語教科書に見る敬称の問題」『女性学評論』第 18 号, 39-57.
- 石川有香 (2020) 「日本の中学校英語教科書に見る女性表象—男女共同参画社会を目指した英語教材研究—」石川有香 (編) 『ジェンダーと英語教育—学際的アプローチ—』大学教育出版, 3-43.
- 伊藤明美 (1999) 「英語教育とジェンダー—中学校の教科書を中心に—」『藤女子大学・藤女子短期大学』36 号, 61-83.
- 伊藤明美 (2006) 「テキストに隠されたジェンダー・バイアス—中学校の英語テキストを中心に—」『藤女子大学・藤女子短期大学』43 号, 101-111.
- 稲永知世 (2022) 「中学校英語教科書における男女登場人物の視覚的表象—人物紹介イラストに注目して—」『英文学論集』第 29 号, 55-88.
- 稲永知世 (2023a) 「中学校英語教科書における男女登場人物のディスコース上の役割」『MEDIA, ENGLISH AND COMMUNICATION』No. 13, 31-54.
- 稲永知世 (2023b) 「中学校英語教科書の批判的ディスコース分析—再生産される異性愛規範 (heteronormativity) に焦点を当てて—」『英文学論集』第 30 号, 45-66.
- 木村涼子 (1999) 『学校文化とジェンダー』勁草書房.
- 木村涼子・小玉亮子 (2005) 『教育／家族をジェンダーで語れば』現代書館.
- 河野真太郎 (2023) 『正義はどこへ行くのか—映画・アニメで読み解く「ヒーロー」—』集英社.
- 崎田智子 (1996) 「英語教科書の内容分析による日本人の性差別意識の測定」『実験社会心理学研究』36 (1), 103-113.
- 佐々木恵理 (1996) 「英語の性差別語と日本語人への影響—英語教科書の調査と共に—」『ことば』17 号, 13-30.
- 島田洋子 (2006) 「新しい中学校英語教科書の描く男性像」『京都学園大学人間文化学会紀要』第 16 号, 19-30.
- 鈴木卓 (2005) 「中学校英語教科書におけるジェンダー・バイアス—機能文法を用いた分析—」『フェリス女学院大学文学部紀要』40 号, 19-28.
- 野呂香代子 (2001) 「クリティカル・ディスコース・アナリシス」野呂香代子・山下仁 (編) 『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み—』三元社, 13-49.
- 村松泰子 (2003) 「学校教育とジェンダー—研究と実践の動向—」『学術の動向』, 36-40.
- 文部科学省 (2008) 「教科書検定制度について 2 教科書検定の必要性」(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/tosho/003/gjijiroku/08052214/001.htm ;

2024年1月29日最終閲覧)

参考辞典

Longman Dictionary of Contemporary English (6th ed.) (2014) Pearson.

